

ふるさと歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第四十八号 (二〇一〇年五月)

風に吹かれて (10 - 05)

白井啓治

『戻り道のさがすなと春のてふてふ』

当会報も今月号でまる四年をクリア。四十八号となった。会員の皆がそれぞれに確実な点を打って来た一つの成果として大いに自慢しても良いだろうと思う。

ヒラヒラと自在に上下左右しながら風を泳ぐ春の蝶に己の信条を言わせてみたのであるが、私は間違えたり、失敗したと気付いたら、その行動をその時点で止めにする。そして、その場所からまた新しい道を決め、ジグザグであつても前に進むことを志向する。

よく失敗したから元に戻そうとする人がいるが、元には決して戻れない。元に戻ろうと思考する人達の多くは、自分のこれまでの行動を悔んだりする言葉を吐くものであるが、実に時間の無駄使いだと思ふ。

失敗を後悔し、悔めば時間が元に戻るのだから大いに後悔するが、そんなことは決してない。だからそんな時間の無駄使いはしない。

「敗戦も当に風流なり」

大好きな言葉である。敗戦も風流なり、そう考えれば人生とは如何にあるうとも愉快である。

あとの後悔先に立たず、では事の前に良く考え、検討するが大事と論しているが、これを確り守っていると石橋を叩いても渡らず、になつてしまふ。石橋、落っこちても良いじゃないか。渡れて愉快、落ちても愉快。人生何かが起こるから愉快なのである。

少し前の雑記のノートにこんな事を書いていた。『そこに清らかな流れをみたら、これはもうその流れに身をあずけるしかないだろう。清らかな流れでも、ただ眺めていても何も起ることはない。だったらその流れに身をあずけるしかない。流れに身をあずけた時、そこに良質な女性がいたら迷わず恋をして、確かな腰を抱くしかないだろう。良質な女性と一緒にならば、何時流れにのみ込まれて、命の水の流れに死暮れても、後悔するものはない。こんな私を危険な奴だとか危ない奴と言う者もいる。しかし、そこに清らかな流れと良質な女性がいたら、そうするしかないだろう』

つい先日記したものであるが、そのとき自分の情態がどうな風だったのか、記憶の蘇ってこない。これは、いよいよアルツハイマーの症状に見舞われて来たのかなと思わず苦笑してしまった。

四月末の風の会定例会は、女性陣全員がお休み

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会もお陰様で今回でまる四年をクリアしました。当会では、ふるさと歴史・文化の再発見と創造を考える仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、ふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に勉強会を行っております。

会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費として)

入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井啓治 0299-24-2063

打田昇三 0299-22-4400

兼平ちえこ 0299-26-7178

伊東弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」

<http://www.furusato-kaze.com>

で、老いた野郎ども三人で馬鹿話をしていたのであったが、私は検査のたびに基礎代謝を上げるために運動をなさいと言われて帰る、と話したところ菅原兄から、文章を書いたりすることは脳を良く使うためエネルギー消費も高くなるので、大丈夫ですよと言われた。それで気を良くした訳ではないけれど、毎日せつせつと一行文を咳いている。その効果があったのか、先日の検査での成績は若干ではあるが改善されていた。

古代エジプト文明の風に吹かれて(2)

兼平ちえこ

三月八日〜十五日、エジプト周遊八日間の旅を前月号(四十七号)よりお伝えしています。前月にお知らせしたピラミッドが集中するエリアの首都カイロには、イスラーム建築や博物館など、見所が集まっている。今回はエジプト考古学博物館から巡ってまいります。

この博物館は、カイロの中心部、タハリール広場の一角に位置している。一八三六年にカイロ近郊に設立されたが、一九〇二年に現在地に移転された。

厳重なチェックを受け入館。重厚な風格のある建物である。一階と二階と合わせ、現地のガイドによると、ツタンカーメンの黄金のマスクをはじめとして十二万を超えるという驚くべき文化財があるという。まるで文化財がひしめき合っているようだ。館内のエジプトの歴史を遺物からくまなく知ろうとすると一ヶ月も掛りそうに思える。

二階の半分近くが、ツタンカーメン王の財宝というから驚きである。

一九二二年王家の谷で発見されたツタンカーメン王は、推定十七・八歳で亡くなった少年王だった。極端な宗教改革を行った先代の王(ツタンカーメンの父)、アメンヘテプ四世と共に異端視されたらしく歴代のファラオ(国王)の名を記した、王名表から名前を消されていたため長い間、その存在すら忘れられ、奇跡の発見により蘇ったツタンカーメンは世界で最も有名なファラオとなった。展示品は黄金のマスクを中心として金色を放つ装飾品がところ狭しと光り輝いていた。

黄金のマスクに用いられた金の純度は21K。装飾に使われている貴石のラピスラズリー、トルコ石、紅玉翠は金と合う色合を選んで、青や紺は来世、赤は現世、金は永遠を表して、意味のある素材を使いながら美のバランスを保っているのが素晴らしいということだった。

頭部のコンドルとコブラの模様は上下のエジプト(古代エジプトは、ナイル川の上流に当たる上エジプトとナイルデルタ周辺の下エジプトに二分されていた)の統一を意味し、背中には死者を守り天国に導く呪文があった。

遡ること約三三〇〇年前、日本では今、一三〇〇年前の平城京遷都に注目されているが、それよりも二〇〇〇年も遡る世に、この様に財宝が変わらぬ輝きで、私達の前に雄姿を誇っている。

資源の豊かさ、技術と権力に羨望の眼差しで凝視するばかりであった。そしてまだまだ驚異は続くのであった。

王家の谷で発見されたツタンカーメン王は墓の盗掘に免れ、入口も狭く目立たなく十六段の階段を下りた所に副葬品(二つの部屋に別れて)とともに、金箔の貼られた四つの巨大な厨子の中に、更に入れ子細工のように三つの人型棺の中に、黄金のマスクとともに発見されたという。人型棺の三つの顔と黄金のマスクと四つの顔が全部違うのは謎とされているとの事だった。

四つの厨子の最初の厨子の大きさは見上げるほどの箱型(大きさを聞きそびれてしまった)であった。驚く事にこの厨子は折りたたみ式で、墓の中で組み立てられたという説明であった。

その他に若きファラオに妻のアンケセナーメン(ツタンカーメンより四歳年上)が香油を塗る姿

が描かれたツタンカーメン王座や、後ろ手に縛られた捕虜の絵を描いたツタンカーメンのサンダル、これは絶えず外敵を踏みつけているのがファラオの務めであるという。

そして儀式用寝台、分解された戦車など。またその他の歴代の偉大なファラオの出土品はそこそこに限られた時間に追われ、次の見学場所は同じ二階の隅にあるミイラ室へ。

この場所は別料金。日本では考えられない展示物である。三〇〇〇年前の生きた人間体の一部分との対面である。内心の恐ろしさを押さえながらの見学であった。室内は照明が落とされ湿度や温度の調整も注意が払われている。

十体余りの王や王妃のミイラが、ガラスケースに安置されている。手の位置等も、胸の上で合わせられているもの、片手は何かをつかもうとするもの、さまざまな表情があった。九十歳近くまで生き、建築王の異名をもち、国内各地に自らの彫像や神殿を残した、ラムセス二世には確りと対面することが出来た。その他は歴代ファラオについての予習もせず、又、見学初日だったので知識もなく、ただ鉄の塊のような痛痛しい、光景だけが残っている。むしろこれからの見学の方々にはエジプト考古学博物館に関しては、多くの遺跡を見てから最後に、じっくりとたつぷりの時間をとっての見学がより深いものが得られる事とおすすめしたいと思った。

その日の夕方にはピラミッド群の多いギザ地区、メンフィス、サッカラ、ダシュールの都市を後に、カイロ発航空便で一時間。ルクソールの都市へと降り立つ。

明けたルクソールの市内は、カイロの景観とは

違つて、メーンの首路もきれいに整備され、緑も多くブーゲンビリヤをはじめ、色とりどりの花々が街を美しく装っていた。

ルクソールは古代都市名をテーベと言ひ、ファラオの権力を誇示した巨大な建築物が建ちならぶ所であった。

巨大な建築物から吹く風の流れは来月といたします。

・三千年前のファラオ もの申す

後世に残る偉業を

・柔肌の みどりは豊か

ちえい

「人間の本性」(三)

菅原茂美

本会報も4号ということは、満4年です。これまで全メンバーが、毎月、一度も欠けることなく、一心に書き続けたということは、正に驚異です。諸先輩方に心から敬意を表します。

私は偶然のきっかけから、本会員の(今の所)末っ子として加入させていただいたのは、第19号(07年12月)からで、本月号は、私の30番目の作品ということになります。諸先輩方に導かれながら、今後、力の続く限り、投稿し続けたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

* * * * *

さて、2か月続けて、「人間の本性」などという、大げさなテーマを掲げ、論じまくったが、独善と偏見を顧みず、本月号も、その由来する根拠に迫ってみたい。

人間の本性を知るためには、一法として、どのような遺伝子が、どんな時期にどんなふうに変現すれば、人間はどんな行動を取るのか? 全て科学的に、客観的に観察する方法がある。すると、あまりにも唯物論的と反発を受けるかも知れないが、感情や知性は所詮、生きた細胞の生命活動の所産なのである。従つて、究極は、細胞の生理学が分からなければ、人間の何たるかを知ることが不可能とも言える。今、世界の科学者は、人間の「心」が、どの細胞で、どのようにして生まれ、どのように行動を支配するか? 懸命に探求が続けられている。私もそのような観点から、人間観察を進めていきたい。

人類の長い歴史の中で、これが人間のやることか? と首を傾げなくなる事件は無数にあったが、そのような行動を起こさせた根本的な動機・誘因・必然性は何なのか?。人類の進化上避けて通れない不可欠の理由でもあったのか?。知性もあり、理性もある万物の霊長ともいわれる人類が、野獣にも劣る残酷な行動を、何遍も繰り返してきた。特に私が気になるのは、公開処刑など、残酷極まりない事例だ。スターリンは、餓えた農民が落ち穂を拾ったら、国有財産を窃盗したとして、公開銃殺にしたという。アメリカのつるし首・フランスのギロチン・そして北朝鮮では、デノミ失敗で責任者を公開銃殺にするという。日本でも三条河原での公開処刑などの歴史がある。これらはい体何事だ? 人間のやる事か?

NHK特集の「アフリカンドリーム」を見た。今から16年前ルワンダで、宗主国ベルギー人は、原住民の鼻の高さをノギスで測り、ツチ族の鼻が他より幾分高いので、文明人に近いとして一割の

人口のツチ族に多くの権限を与え重用した。九割の鼻の低いフツ族が怒つて内戦に発展し、80万人もの相互虐殺が行われた。双方、世界に散った難民は、今ようやく祖国に戻り、復興に立ち上がっているという話だが、このような混乱を引き起こした宗主国の狡猾さ。文明国とは一体、何だ?

ペルーを征服したスペインのピサロも、インカ帝国を滅ぼすに当たり、さんざん騙し討ちなどで枢要な王侯を倒し、後は巧妙に双方を操り、インディオ同士で殺し合いをさせた。

私に言わせれば、平和に暮らす原住民を、無謀にも侵略した文明国こそ最悪の野蛮国だ。わが国でも、蝦夷やアイヌ人を、ほぼ滅亡に追いやった大和朝廷や、その後の政権は、筆舌に尽くしがたい悪の権化だ。これらは、人間の心の奥底に潜む残虐で凶暴な本性の表れと言えよう。

人間行動の醜さ探しばかりしていると、米屋の番頭(あら拾い)みたいと、軽蔑されるかもしれないが、それほどまでしなければ、権力者は体制を維持できなかったであろうか。

先日の報道によれば、高崎山で餌付け中の日本ザル集団で、ゾロという名のボスは、今28歳(人なら80歳相当)だが、11年間も長期政権を維持しているという。彼がクーデターを起こした手法は、単に前のボスからバナナを奪った、ただそれだけのことであった。動物の世界では、なにも殺し合いまでしなくとも、政権交代は、スムーズに行われる。これに対し人類は歴史上、幾多の残酷な流血革命が行われてきた。どこから見ても、智慧ある行動とは言えない。人間の本性には、こういう残酷性が潜んでいるとしか思われない。その原因は、長い野生時代から、食糧の奪い合

い、縄張りの維持確保が、大脳発達とともに、欲望の肥大化をきたし、巧妙化し、より確実なものとする為に、後に禍根を残さぬよう徹底的にライバルを倒す。復讐ができないまでに叩きのめす。動物達の温和な裁きに対し、人類は陰湿で、最悪の手法を取るようになっていった。生命維持のための基本的な大脳に、強欲な、凶暴性を発揮するもう一層の大脳皮質が覆いかぶさって、毒饅頭は肥大化していった。

さて現在、脳科学は、大脳のどの部分がどんな分野を担当しているかなどは、大分、分かっています。しかしどんな細胞で、どんな分子同士が反応すれば、どんな感情が発生するかなどは、一部を除き、いまだに明確に解明されていない。それが分かれば、うつ病などで落ち込んでいの人に、気分爽快で、積極的な行動をとらせる薬品開発の端緒となる可能性もある。脳細胞の中で、どんな化学反応が起れば「心」が生まれるのか？こんな物言いをすれば、人間とは、そんな簡単な物質反応に支配される単純なものではない……と反発を受けそうだが、どっこいそうではない。セックスの絶頂期に分泌されるオキシトシンというホルモンを、何の関係もない雌雄のラットに注射したところ、激しく愛し合い子供を大事に育てるといふ共同責任感を高揚させることがはつきり証明されている。強烈な母性本能を発揮する。野生動物では、命がけて子育てをするように、しっかりDNAにプログラム化されている。同じことを人体実験したわけではないが、原理は全く同じ。どんな高尚なことを口にしても、所詮人間は単純な物質に支配されている。

人間も基本は野生動物となんら変わりはないの

だが、今日、複雑化した文化というか、社会の病理というか、生物が何億年もかけて取得した生存原理を、今の人間はメチャクチャに破壊し、我が子を虐待し、餓死させるなど、狂気の沙汰が巷に散見されている。こんな事は、社会のほんの一部にすぎないと人は言うかもしれないが、もしかして、人類滅亡の前兆と言えなくもない。

そして現在の人類活動は、永劫に繁栄をもたらす基本的な行動である……などは到底思われない。どんな部門を見ても、無節操が元で、人口過剰をもたらす自然破壊や資源の枯渇に結びつく。そして乱獲の上、絶滅に追いやった生物種は数えきれない。更に、野生時代からの縄張り根性が、そのまま個人エゴ・国家エゴに結びつき、市井の身近なトラブルから、大きくは、世界戦争を引き起こす要因が、至る所に見え隠れしている。

現在、世界の核兵器保有量(約22,000発。その90%は米露が保有)は、全人類を何回も滅亡させうる量だという。核兵器は現在8か国が保有しているとされるが、核兵器の廃絶を訴えたオバマ大統領は、その実現の可能性はともかく、期待を込めて、ノーベル平和賞を受賞した。しかし、軍需産業でメシを食っている「死の商人」が、08年度世界の軍事費46兆ドルを縮小するなどとは、到底考えられない。

世界の到る所で小競り合いをいいことに、古く性能の悪い兵器を、大国は、恩に着せながら、後進国などに売りつける。一人一日2ドルの国で、国営発電所が予算不足のため、しょっちゅう停電しているのに、戦闘機が、毎日ブンブン空を飛んでいる実情を、私は中米でしみじみ見てきた。隣の国にだけは負けたくない……という意地の張り合

いというか、人間の悲しい性(さが)というか……これも人間の本性丸出しという類であろう。

現生人類の学名「ホモ・サピエンス」は、ラテン語で「智慧ある人」という意味だが、どこからどう眺めても、人類総体として見た時、今日の人類は、智慧ある生き物の集団とは到底思えない。もし本当に智慧ある動物ならば、自分達が生活する環境を、自らの手で汚染していく愚かな行為は、本能的に回避するだろう。子育て中の鳥の巣など、子供が汚しても、親がすぐ綺麗に片付ける。しかし人類は、水・空気・土壌を汚染し、毎日食べる食糧にまで、時には危険な物質が混入している。子孫が安全に暮らし、未永く繁栄できる保証などどこにもない。智慧なき動物の悲しさ。

それどころかかえって、成層圏以上のオゾン層はフロンなどで破壊され、有害な紫外線はストリートで地上に届く。オゾンホールが拡大すれば、地上の生物のDNA破壊が進む。(宇宙飛行士に、これから子を生む若い男女が選ばれない理由は、そこにある。)浅い海で、植物が30億年もかけて生産した酸素が、上空で、オゾンのベールとなり、地上の生物を護ることとなった。そのため、有害紫外線が地上に届きにくくなり、DNAが破壊されなくなつたために、やっと今から6億年前、まず植物が地上に成功した。続いて脊椎動物が両生類として3億年前、陸上に進出できたのだ。両生類↓爬虫類↓哺乳類と進化し、やっと人類出現という、気の遠くなるようなドラマを展開したのに、近年のわずか百年足らずの工業生産で、人類は途方もなく愚かな物質文明を築きあげてしまった。未来学者が人類の残された時間は、せいぜい一万年そこそことも言っている。今の今、オレが生き

ている間だけ豊かなら、それでいいや……これでは、到底智慧ある生き物とは言えないだろう。要するに、人間とは、それほど利口な動物ではない。

そこで私に言わせれば、大局的に見て、この世で最も智慧ある動物は、スローライフをモットーとし、環境を汚染しない南米のナマケモノである。鼻提灯で、木にぶら下がり、昼寝ばかりしている。これぞ地球を救う英雄である。救世主だ。

本当に利口な動物は、己の了見というものを弁えている。食糧事情により、子供の数を制限する。自然界で種の繁栄は、一にも二にも食糧事情だ。文明の興亡も同じだが、食糧足りての人口増加なら話は分かる。それが不安定なのに、子供の数を増やすから、人口過剰で争いが頻発し、争奪戦が激化する。巨大な文明が滅びていったのも、所詮は食糧難が元である。疫病の発生などは、100%の死亡率の病気はまずない。必ず何%かは生き残る。生き残った者は、強力な免疫力を獲得し、再復興できる。水や食料の枯渇が文明を滅ぼす。

さて、人類は成果主義とやら、野蛮な風習に追いまくられ、朝から晩まで汗水流してセカセカ・キュウキュウ働き続ける。無理やり働かされる。過労死や、うつ病で自殺者が多数出る。そんな経営者は人間失格である。世界が競って効率主義とか、成果主義とか、精神の消耗戦を展開している。何が自由主義だ？ 誰かが自由であるということとは、その分、誰かが自由を奪われ、泣かされているということだ。人類に智慧があるのなら、社会全体が平等に豊かになるべきだ。貧富の差がありすぎる社会など、どんな大国でも心貧しい、野蛮な国と言えよう。それを、早期に軌道修正できないのなら、愚か者と罵られても仕様があるまい。

いかに聖人君子といえども、霞を食って生きてはいけない。人生、日々これ食うか食われるかの戦いの連続だ。野生時代から、食糧確保、天敵との戦い、種族間闘争。その他、疫病・有毒の動植物。更に襲い来る自然災害・気候変動。生半可な処世術では子孫を残せない。それらリスクに対応できる形で体の生理機能が進化し、それが本能となり、本性となったのであろう。

そこで、人間活動を客観的に見てみよう。就活・婚活・出世・スポーツ・政財界……どれもみな、共通項として内在するキーワードは、「競争」ということだ。生きるためにライバルと激しく競い合う。勝者は栄冠をつかみ、敗者は無念の涙を流す。プロを目指したが果たせなかったスポーツ選手や棋士や芸能関係。更に政治家崩れなど、巷に無数にいる。名を残す人はほんの一握り。多くは、本来の夢を捨て、諦め、方向転換して、かろうじて生き長らえる。人によっては、空蟬さながら。魂の抜けた虚脱状態で生き長らえる。とにかく「競争」で、がんばりがらめの世の中にあつては、「中の上」あたりがぶら下がるのは、容易なことではない。

ではなぜ、人間のみならず、生き物全てが、このように「競争」という網に縛られるのか？ 多くの植物は、背伸びをして太陽光線を一人占めしようとする。ヤブカラシの根性なんて凄いなものだ。一方動物でも、ヨシキリなどに、我が子を育てさせるご存じカッコウの托卵など、これほどまでに汚い手段で子孫を残そうとするなど、神様も「おふざけ」が酷すぎる。しかし、托卵は、カッコウだけの専売特許ではない。魚もこれをやるといふ。アフリカのタンガニーカ湖に棲むシクリットフイッシュ(A)という魚は、天敵が多いため、卵

や稚魚を親は口の中で育てる。ところが、同湖のナマズの一種のシノドンティス(B)という魚は、Aが自らの卵を口に吸い込もうとする瞬間に、Bの受精卵も、一緒にAに吸い込ませる。すると、Aの口の中でBの卵の方が先に孵化し、Aの卵や遅れて孵化したAの稚魚を食べ、ある程度大きくなると、仮親Aの保護を捨て、平然と立ち去っていくのだという。人間の世界にもかなりの「悪」はいるが、自然界の「超悪」には恐れ入りました。

また、日本の天然記念物のイヌワシは、現在、300羽ほどしかいない留鳥だが、通常2個の卵を産む。しかし育つのは必ず1羽だけである。後から孵化した雛は、「予備の命」と言われる。先に孵化した雛は、後からの雛を突つき殺すのだという。もし先に孵化した方が、巢から落ちたり、天敵にやられたりすれば、後から孵化した予備の雛にもエサが与えられるが、先の方が元気なら、親も予備の方にはエサをやらないのだという。食物連鎖の頂点に立つイヌワシにしてこの状態なので、生き物が生き抜くということは、ただ事ではない。このように自然界では生き抜くために、想像もつかない激しい「競争」が展開する。

競争と言えば、私は中米のマヤ遺跡を訪ね歩いたが、古代マヤでは、異部族を駆り集め、サッカー競技場のような施設が神殿の一部にあり、2組で競技させ、負けた方は生贄(人身供犠(へくぎ))として、首をはねられ、神前に奉げられる。神殿内には断首台など石造の構造物がしっかり残っている。現在でもオリンピックなど、しかるべき成績を残せなかった選手は、オチオチ自国に帰れない事情の国もあると聞く。競争は悲劇を招く。人間が生きる行動原理を、全て動物の行動に起源

を求めるのは、多少飛躍があるかも知れないが、人間も動物として、厳しい自然の中で生き残るためには、何百万年も自ら築いてきた生存のためのノウハウが、DNAにしっかりと刻み込まれている。それを忠実に実行できた者のみが、自然選択により生き残れたのだ。何百万年の行動の基礎となったのは過酷な環境の厳しさであった。その厳しさに耐える行動パターンが即ち、人間の本性となっていたのであろう。いかにして生き残るか、その生き残るためのノウハウの積み重ね……それが本能であり、本性というものであろう。

軍艦島

小林幸枝

軍艦島というのをご存じでしょうか。二年ほど前でしたか、テレビの番組に軍艦島というのを知って、ぜひ一度行ってみたいと思っていたら、昨年から観光地として一般公開されることとなり、妹から公開初日に行こうと誘われ、二つ返事に出かけてきました。軍艦島を見学して来た時の心象は、今も褪せることなく鮮明な形で残っています。それで、一年後の今、軍艦島の紹介を書いてみたいと思います。

軍艦島は、長崎県にあり、正式には端島(はしじま)といいます。端島は、石炭の発見によって開発が始まり、石炭需要が無くなると見棄てられSFアニメの廃虚の島となつてしまいました。

軍艦島こと端島に石炭が発見されたのは文化七年(一八一〇)と言われており、当初は細々と採炭されていましたが、明治二十三年に三菱社に買

収されてから、大きく発展しました。ここで採掘された石炭は、八幡製鉄などに使われ、閉山するまで日本の基幹産業を支えてきました。特に、大正時代には飛躍的、驚異的な発展を遂げ、東京でもまだ珍しかった、鉄筋コンクリートの建物が群立していたのでした。しかし、戦後の高度成長とともに石炭の需要は消滅して行き、昭和四十九年一月の閉山とともに島民が一斉退去し、一瞬にして無人の島となり、島への出入りも閉ざされ、廃虚と化してしまつたのでした。

ところが、一瞬にしての無人化という封じ込めによつて軍艦島は、見事ともいえる昭和のタイムカプセルとなつたのでした。昨年、訪れての真つ先の心象は、私の小学一年生ぐらいの時代が、手つかずの状態に、埃をかぶつてひっそりと存在していた事でした。ふすまに張り付けられたカレンダーや映画スター、アイドル歌手等の写真。ダイヤルチャンネル式の白黒ブラウン管テレビ、角の丸い電気冷蔵庫、いかにもといった電気炊飯器。ローラー式の洗濯機。色褪せ、錆ついたりしてはいるけれど、さっきまでそこに生活者がいたそのままの状態に昭和があるのです。

軍艦島は何度かの埋め立て工事によりわずかに拡張はしましたが、南北に約四八〇メートル、東西に約一六〇メートル。島全体は護岸堤防で覆われており、まさしくコンクリート製の軍艦と言える姿です。

面積六、三ヘクタールという小さな島に、昭和三十年代には実に五三〇〇人の人が住み、学校、病院等の公共施設をはじめ映画館、各種商店、旅館などがひしめく超近代都市を形成していたのでした。無かつたのは墓地だけで、その為に閉山後

ギター文化館

2010 CONCERT SERIES

今年はギター文化館が開設して18年になります。本年も魅力いっぱいコンサート・シリーズを予定しております。

- 5月16日(日) PM3:00~國松竜次ギターリサイタル
- 5月23日(日) PM3:00~烏力亜娜古箏コンサート
- 5月29日(日) PM3:00~マリオ鈴木ギターリサイタル
- 5月30日(日) PM3:00~ディアンジェロ・シシリアギターリサイタル
- 6月13日(日) PM3:00~高橋竹童津軽三味線のひびき

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35

☎ 0299-46-2457

Fax 0299-46-2628

《ふらの》

ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦
蕎麦会席料理のお店です
(ギター文化館通り)

看板娘(犬)「うらら」ちゃんが
皆さんをお迎えいたします。

営業時間 11:30~15:00
16:00~18:00

月・木曜日が定休日です。

電話 0299 - 43 - 6888

の三十五年間は完全なるタイムカプセルとして存在したのだ。

二〇〇三年、この軍艦島を世界遺産に登録する会が立ちあがり、二〇〇八年九月に世界遺産暫定リストの入ったのだ。

長崎の小さな島、端島に燃える石の石炭が発見され、それがわずかな年月の中で黒いダイヤに変貌し、島全体がコンクリートに固められ、軍艦島呼ばれるようになった。わずか一六〇年という時間の中で超未来都市が建設され、そしてSFアニメの廃虚の都市にまでを猛スピードに体験させられた数奇な島。

今は、世界遺産の暫定リストに入り、多くの観光客を呼んでいます。これから先、どのような運命を辿って行くのかはわかりませんが、人間が傷つけ痛めた自然を、時の移ろいという自然の作用が軍艦島を人類未体験の自然を作り上げた。その風景を見た時、私は異様なショックを受けた。

手つかずに現状を保存することを「保全」というのだそうです。歴史的には三十五年間の完全保存等それほど自慢できることではないでしょう。でも、でもたかだか私より若い程度のタイムカプセルの保存の実際を目にしたとき、保全することの文化価値の如何に高く、貴重なものであるかの実証を突き付けてくれました。

六月のことば座公演は、村上佐志能神社をモチーフに物語を書いて貰いました。その中で龍が、「許しておくれ。私の希望の為の忍耐はもう尽きたよ。天に昇り龍神になることはもうやめた」という逆説的に歴史の中に刻み込まれた物語を保全することの重大さを詩にしています。もしかしたら、軍艦島を視てきた時の心象を、龍が書かせ

たのかもしれない。それと、この風の会の会報が今回でまる四年をクリアすることにも関係があるのかもしれない。

ここにいますよ

伊東弓子

生命が湧き出る春が来た。草々が大地に色彩りを添える。空も、陽射しも明るさを増す。風、土にも変化が始まる。大地は水分を含んで柔らかくなり、焦茶になった土は植物、動物の活動に備えている。忘れていた物が何年かぶりに芽を出したり、伸びている姿を発見することがある。姑がくれた花の芽が出ているのを今日見つけた。

「ゆみ子さん、私のこと忘れないでね」

と言っているようだった。申し訳ない気がしてもう一度見直したりしてみた。

そうだ。あの感動の日から四ヶ月経った。一本の枝垂れ桜の木の間を通る度にずっと眺めて来た。四月に入って淡い桃色の花が開いた。木の上の方の枝に花をつけ、下の方の枝には小さな葉が顔を出し始めた。桜の名所の便りが聞かされたり、故郷の桜並木も楽しんだが、それ以上にこの一本の枝垂れ桜に心を奪われた春だった。

あれは一月某日雨上りの後の上天気の朝だった。文化センターに行く為いつもの道を歩いていた。坂を上りきった所で、不図、声を掛けられた様に感じて振り返った。勿論そこに人影はなかった。私が坂を上ってきた息切れの余韻が残っているだけだった。と思ったがそこに美しい姿を見つけた。

「わあ、きれい」

補聴器専門店 いしおか補聴器

補聴器は、大きく聞こえれば良いというものではありません。音がクリアに聞こえるためには、音量を上げるだけではいけないのです。医師の正しい診断と、補聴器専門店としてのスキルが大切です。合わないメガネで目を悪化させることと同じことが補聴器にも言えます。お気軽にご相談ください。

当店は、「ふるさと風の会」「ことば座」を応援し、会報や風の文庫、ことば座公演チケットなどを取り扱っております。また、風の会のことば絵作家、兼平ちえこさんの絵が常時展示してありますので、お気軽に、お立ち寄りください。

(場所：石岡市勤労青少年ホームの並び、直ぐそば。駐車可)

石岡市石岡2158-6

工房オカリナアートJOY

母なる大地の声(音)を
自分の手で紡ぎ出してみませんか。
あなたの庭の土で・・・また大好きな
雑木林に一滴みの土を分けてもらい、
自分の風の声をつるさとの風景に唄
ってみませんか。
オカリナの製作：演奏に興味をお持ち
の方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465

TEL0299-55-4411

反射的に声を出していた。大きな感動だった。一本の枝垂れ桜の立ち姿の美しさに暫く立ち止まって見居った。細い枝の揺れてる様子は糸柳ならぬ糸桜と呼びたいようだった。僅かな寒風の中で揺れているその優しい動きは、振袖の袂にも似て、木全体が若い娘の立姿のようだった。それに木膚の輝きは一層この木の美しさを引き立てた。朝陽を受けて白銀の様に光っている。そこに青味が入って美しさを増している。横縞の灰色、黒い線がところどころにあつて全体をひきたてるポイントとなっている。

「私、ここにいるの。見て」

と呼びとめられたように感じた。それから、この木を「糸桜」と呼んで、通る度に足を止めて見いった。この木との係わりをもつて四ヶ月めに入る。その時々姿にその木に、係つた人の姿を見て来た。これからも月づきに美しさを見つける事があるだろう。

二月に入ると枝を切つて剪定されていた。雪が何回降つたがその合間をみて枝の片付けをしているというお婆さんに合つた。八十代に入ったかと思われる人だった。どちらからともなく話し始めた。

「たった一人の孫がいたが、遠い国へ嫁に行つてしまった。湖の向こうの成田つてとこから行つた。親達は送つて行つたが、私等は辛くて行けなかつた。この家はもう終わりだ。先祖様に申し訳ねえ気でいっばいだった。何も外国人と一緒になんなくとも、日本にだつて男は一杯いんのにと思つたよ。孫にはすまねえと思つたが門出を祝うところじゃなかつた。しばらくして孫には孫の人生があんだから…と爺婆で自分達を納得させたよ。

ふるさと風の文庫

新刊

- ◎ふるさとの歴史物語に新しい扉を開いた打田昇三の
歴史エッセイ「ふるさと風にたずねて」(征服の大義) (1000円)
- ◎菅原茂美第二作 「遙かなる旅路」(2) (定価: 500円)
- ◎伊東弓子作 「風のかげ」 (定価: 400円)

打田昇三: ふるさと「風にたずねて」(I・II・III・IV・V)
(定価: 1000円)

菅原茂美第一作「遙かなる旅路」(1) (定価: 500円)

我がふるさとを“風のことば絵”という新しいスタイルのふるさと表現絵の兼平ちえこの足跡を辿る一行文を集大成!!

○ふるさと「風のことば」 (定価500円)

日々の暮らしの中にふるさとを想う心を呟いたエッセイ集

- 兼平ちえこ 「風に押されて」 (定価500円)
- 小林 幸枝 「風に舞う」 (定価500円)
- 白井 啓治「移ろう風の中に」 (二冊組: 800円)
- 近藤治平「風に吹かれて」 (二冊組: 800円)

ふるさと風の文庫は、・ギター文化館: 0299-46-2457

・いしおか補聴器: 0299-24-3881

にて販売しております。

ふるさと“風”の会 事務局 石岡市石岡 13979-2 (白井方)
電話 0299-24-2063

そんでなああの孫のことを思い、この木を植えた。もう五く六年経つよ。去年はな、三つ四つ咲いた。今年一杯咲くと思うんだがどうかかな」
きつと姿形のよい娘なんだろうなど、木の姿をみていた。剪定された木の形は一層整っていた。話は続いた。

「遠くさ行っているんな苦労をしてんだらう。そういう苦労や悩みを少しでもとり払つてやっべと思つてな、余計な枝を切り落としてやっただよ。爺さんが切り落としてくれたから、間みて俺

が燃してんだよ。灰が、肥しになつたらな」
ひとつひとつの作業にも孫への思いを込めて行っている事をあらためて知つた。
「あの孫はな。栗が好きだったから、枝垂れ桜と一緒に栗の木を植えたんだよ」
近くに六く七本の栗の木が、遙かに大きくなつていた。

「そういえば暮れの頃、栗の葉を集めて燃していた人がいた事を思い出した。あの時は何気なく見ていたが、お爺さんだったのだ。」

「桜の咲くのを楽しみに待ったり、栗を食べては思い出したりし、自分達を慰めているんだよ」

と刺す。孫の小さい頃、よく一緒に食べた。

いてやるのが間に合わない程だった。と楽しげに話す様子が忘れられない。

三月に入ると草が地面を覆い出した。少しづつ少しづつ春の訪れの確かさを感じた。その喜びも束の間お爺さんがものぐさ鎌で、草を根刮ぎ削っている。芝の様な細い葉の草。

「ああ」

と思う中に掘つくり返されていった。栗の木の為には必要のない草なのだろう。刻々と変わる自然界の営みを人は自分達の思いや都合で変えているのだと思いつつ通り過ぎた。菜の花の黄を流すかの様によく雨が降ったが、黄は焦せることなかった。

木枯しに、雪に、雨にもめげず四月になると枝垂れ桜は、木の上の方の枝の節ぶしが桃色がかってきた。長い細い枝の揺れはのんびりとして心安らぐ。変わり安い天候などに左右されずにリズムを刻んでいる様だ。木全体の下の方の枝の節ぶしに緑の膨らみが見えてきた。

花が咲いた。この花をお爺さんとお婆さんは見に来たろうか。寒暖の差が励しかった春先だったからお二人は風邪などひかなかったかなと心にかかった。

枝垂れ桜の数は少なかった。あつというまに散ってしまった。その後小さな若芽が枝全体に出て涼しげに揺れていた。小さな若芽は日に日に大きくなって若葉となった。

一月のあの日、この木の美しさに目をとめてから四ヶ月、その時どきの美しさを感じた。そこか

らはいつても、「私ここにいますよ。見て…」という声が聞こえてきたし、私はその声を聞きたくて足をとめたのだった。

国分寺余話

打田昇三

(追) 中国大陸の国分寺

中国の古代文明は北京から五百kmほど南の安陽県などで、青銅器時代からの実在が証明されている。「殷(いん)王朝」が知られている。殷を滅ぼした「周(しゅう)王朝」の中期ぐらいには日本列島の何処かの小さな島国が「周の国」と国交した記録が向こうに在ると聞いたことがある。

その後、何百年も経って物好きな中国人が日本に来て文字を伝え、金属技術などを広めていったのであるから、この国の文明は多かれ少なかれ何事も中国の影響を受けている。にもかかわらず、一般には古代の中国について関心がない。例えば、国分寺の話をするにしても、その根元は中国に発しているのだから、ここは少し寄り道をして中国の歴史を覗いて見る必要があるように思う。

伝説では殷の前に「夏(か)」と言う国が有ったらしいが物的証拠は出ていない。殷の別名は「商(しょう)」と言いはる商都である。基本的には交易の国なので、周に滅ぼされて国民が散り散りにされた後も民族同士で交易をしていたから、これが「商業の語源」になったとされている。

初め周王朝は黄河流域の西安近郊に都を置いたが第十代の王の頃から国力が弱まり、幽霊と同じ字で幽王(ゆうおう)と言う寒い名前の第十二代

目の王様が国を滅ぼした。しかし、すぐに再興されたので国名を「西と東」に呼び分けている。

「西周」最後の王になる幽王は、絶世の美人と言われる褒姒(ほうじ)の虜(とりこ)になって政治を疎かにした。褒姒の生まれについても薄気味の悪い言い伝えがあるけれども、主題に関係が無いのでここでは省略をする。一般に美人は笑顔が素敵なものだが褒姒は絶対に笑わなかった。

幽王は何とかして褒姒を笑わせようと努力したが駄目だった。ある時に敵の襲来を告げる狼煙(のろし)を上げてみると国中の諸侯たちが王宮に駆け付けて来た。回りに敵軍は居ない。呆気に取られる諸侯たちの様子を見た褒姒が初めて笑った。

幽王は、褒姒の笑う様子を見たので何度も狼煙を上げさせては王宮に人を集めた。かねてから王に恨みを抱く貴族の一人が、周の国を狙う遊牧民族の犬戎(けんじゅう)に内通して兵を挙げ、王宮に攻め寄せた。幽王が狼煙を上げても援軍は集まらず幽王は殺され、褒姒は捕えられた。

背いた貴族は、幽王が追い出した前の皇后の子を探して国王に立てた。これを「平王」と言う。平王は都を洛陽に遷して国名を「東周」にしたが、国名と王様を替えても景気は良くなりならず国力の衰退は目に見えて、その後の中国大陸は五五〇年間に亘る群雄割拠の「春秋・戦国時代」が続くことになる。これを収めて広大な国土を統一したのが黄河上流に興った「秦(しん)の始皇帝」である。

始皇帝が一代で中国全土を統一したことは知られているが、最初から強かった訳ではないので、「秦の国」のことに触れておきたい。「秦」は周の国の諸侯として中国大陸の西北部、渭水(いすい)という黄河上流の甘肅(かんしゅう)省、陝西(せ

んせい)省辺りに封じられた小国であった。その時代の王は武公と言う名であつたらしい。戦国時代には楚(そ)、趙(ちよう)、燕(えん)などの国々と競いあつていたが、一番に貧弱な国だったので未開発の後進国と馬鹿にされていた。

何も良いところが無い秦の国が大陸の覇者となる基礎をつくつたのは、全く縁もゆかりも無い他国の人物である。戦国時代の小国「衛」の貴族で公孫鞅(こうそんおう)と言つた。秦の国へ出稼ぎに来て出世し先に述べた「商」の領主に任命されたので「商鞅(しょうおう)」と呼ばれている。

商鞅の母国である衛の国は河南省に在つて早くから隣国の魏(ぎ)に支配されていた。なお戦後の日本史で登場する「邪馬台国」と国交があつた「魏の国」は別の国である。どうも「魏」と言うのは黄河流域の或る地方を指すようで、同名の国がやたらと出てくるのでややこしくなる。

商鞅は魏の都へ行つて下級役人として王に仕えていた。しかし日本でも同じであるが下つ端が仕事の良い意見を述べても相手にされない。その頃に商鞅は「秦の国王が人材を求めている」という噂を聞いたので知人を介して魏から秦へ移り下役に雇つて貰つた。その時の王は弱かつた武公から三、四代後の孝公という王様であつた。

秦の国では国王が法律制度の改革を目指していたから商鞅は魏の国で見たり考えたりした案を具申して認められた。その意見は日本では徳川家康が江戸幕府を開くにあつて適用した制度に似ていると言われる。つまりは国民を束縛統制して権力を維持する策であるが国家は強くなる。

中国で出来た諺に「狡兔死して走狗烹らる(こうとしして、そうくにらる)」というのがある。

「獲物である賢い兎が捕まつてしまえば猟犬は不要になる」⇨手強い敵が居なくなれば作戦上手な武將は除かれてしまう…と言う意味で、商鞅の行つた強引な改革で国力を増した秦の国は、王様の代替わりで恵文王(けいぶんおう)の時代になり、功労者の商鞅は謀反の罪で家族全員が殺害されてしまつた。それには理由があり、恵文王が王子時代に法に触れた行いをして商鞅が決めた法律で厳しく罰せられかけた時に、取り成す者が居て代りに王子の家来が重く罰せられたので、それを根に持ち貴族たちと組んで商鞅を消したからである。恵文王は商鞅を殺しても商鞅が作つた法体系は変えなかつたから、中央集権が強化され秦の国は少しずつ強い国に変貌していったのである。

恵文王の曾孫に当る人物は莊襄王(そうじようおう)と言う。側室の子だつたため「異人」という名の王子時代には祖父・昭王の命令で同盟強化を目的に隣国の「趙(ちよう)」へ人質に出されていた。ところが両国の関係が悪化したため異人は名前のおり異国で冷遇されていた。秦の国には王の子が大勢いたので見放されていたのである。

その頃、かつて周の国が都とした洛陽の近くに呂不韋(りよふい)という商人が居た。各地を往来して商売をする貿易商のような人物で莫大な富を持ち、野心家でもあつた。その呂不韋が「趙」の都へ行つた時に、秦の国から人質として来ている異人のことを知つた。呂不韋は各国の事情に詳しくかつたので、秦の国の皇后に子供が居ないことに目を付け、不遇の異人を救つて恩を着せる計画を立てた。異人を皇后の養子にする策であつた。

また中国の諺になるが「奇貨居くべし(きかおくべし)」と言ひ、奇貨は珍しい品物や絶好の機会

のことで、好機を逃すなど言う意味で使われる。趙の国の人質となつていた秦の王子・異人を逸材と見た呂不韋がとつた行動がこの諺の基になつている。秦の国へ行つた呂不韋は山ほどの土産物を皇后に届けて、人質の王子を養子にすることに成功した。皇后の養子はすなわち次の国王である。皇后にしても、自分の後継ぎが出来れば縁のない側室の子が国王になる機会を潰すことが出来る。

異人にしても、人質の立場に変わつてくる。今川氏のぎの王子となれば扱いも変わつてくる。今川氏の人質になつていた徳川家康のようなものである。異人は「子楚(しそ)」と改名した。その頃に呂不韋は或る美人の踊り子を愛人にしていて、その女性を子楚に紹介したところ「自分の妻にしたい」と言い出した。実は、その時に女性は身ごもつていたのだが、呂不韋はそれを隠して子楚に愛人を譲り、やがて王子の子として呂不韋の子が生まれたのである。その子は名を「政」と言う。「子持ちの人質」というのも不便なので呂不韋は莫大な金をばら撒いて子楚一家を趙の国から脱出させた。

帰国した子楚は、父の跡を継ぎ莊襄王として王位に就くと直ちに呂不韋を総理大臣に当る宰相に任命した。紀元前二四七年、王になつて僅か四年目に莊襄王は病死し、残された「政」は未だ十三歳であつた。そこで、太后(たいこう)こと踊り子だつた女性と、宰相こと貿易商の呂不韋とが国の実権を握り思うがままの政治を行つた。この二人が密通して繕ひを戻していたのは勿論であるが太后の元気が良すぎて困つた呂不韋は、一人の男を去勢したと偽つて太后に仕えさせた。これが太后の氣に入つて子供が二人も生まれ、周辺には一つの派閥が形成されていったのである。

成人式が済んで、自らの政治を行うため政王子は、先ず後宮のスキヤンダルを排除しようとする偽の去勢男とその親族、そして派閥の者を処刑した。問題の太后は実母であるから助かったと思うが、父親を証明できなかった呂不韋は地方へ飛ばされる前に「どうせ殺される」と判断して自殺した。こうして貿易商・呂不韋の子「政」が父親を死なせ母親を失脚させて秦の国王となった。この王は独裁制のもと徹底した行政改革と郡県制、農業重視政策などで広大な領土を統治し、自ら「皇帝」を称して中国を一つの国家とした。

秦王・政こと「秦の始皇帝」が没すると再び国土は混乱するが、以前と異なると全土の争奪になり、やがて前後に分かれた「漢」の時代になる。松山在住の郷土史家・合田洋一さんが「新説伊予の古代」を出版されて、そこに「志賀島の金印」

の読みは「漢の委（倭）の奴の国王（かんのわののこくおう）」では無く「漢の委奴の国王（かんのいどのこくおう）」であろう：とする説を載せておられる。委奴国は福岡県前原市付近で、金印の年代は西暦五十七年、その頃の日本には小国が乱立しており漢の国に従属していたのであろうか：

少し前の西暦紀元前後には東に漢の国、西にはローマ帝国があつて、中間にパルティア（西アジア）とクシヤン（印度と中央アジア）両国がありその四か国が戦争はしていたが交易もして、それが「シルクロード」になったと言うから東の端の日本には世界中の文化が届いている筈なのだ

が、その割には国民の目が世界に向いていない。漢の国は途中に十数年の中休みがあり前漢と後漢の二つに分かれるが、どちらも同じ民族だったよう

で外征と陰謀と戦乱に明け暮れながら大漢帝

国として四百年の栄光を残しており漢学、漢字、漢詩、漢方薬、漢数字など日本の文化はこの国から大きな影響を受けている。そして日本に伝来した仏教は、先ず印度から西域諸国を経て漢の国に伝わった筈であるが、その時期はいつ頃なのかを尋ねてみるとこれが面白いと言いか不思議と言いか中国の歴史が書かれた何種類かの図書には「仏教の伝来」について触れていないのである。

五十以上の民族が居る中国でその主流となる漢民族は「三皇五帝」つまり三人の神様と五人の優れた帝王が国を創っていったとする伝説を信じている。その一人「神農さん」は、かつて日本でも信仰されていた。世界四大文明の一つ「黄河文明」に由来する伝説であり怪しい部分もあるが、日本の神話のように荒唐無稽、非科学的ではない。

その上に孔子が教えた「儒教」が深く根付いており、特に中国大陸に仏教が入ってきた「後漢の時代」の寸前に居た「前漢の元帝」が国家を完全な儒教国にしていたから、日本のように仏教伝来がニュースにもならず、これが急速に広まることもなかったの

であろうか：多分、大仏像が蚊に喰われた程度の出来事にしか扱われなかった：それでも世の中には地味な研究をされるお方が

いて神様の夢を見た。眼が醒めてから家来にその話をする。「：それは西のほうに居る神様で「仏」という名のお方でしよう：」と言った。そこで明帝が使者を派遣して「その神様を連れて来い！」と命令したのだが、西の方と言っても広過ぎて場所が特定出来ない。使者は、少し遠いけれども苦勞をして印度まで行ってみた。皇帝の使者だから多額の旅費を仕分けで減らされる心配は無い。

それでお出でになるもので、一九八〇年代に仏教美術史の先生が「シルクロードと宗教の道」という著書を書かれNHKが出版していた。さらに「後漢」の都が置かれた洛陽の郊外に白馬寺という寺があり中国最古の寺と言われているのだが、其処に具体的な仏教伝来の話が伝承されているのである。

それが依れば日本の小国「委奴の国王」を従えていた後漢の光武帝の次の王様で酔っ払いのよう

な名前の「明帝」が、或る日、酒も飲まずに寝て

は紀元前後としておくほうが良さそうである。

中国の仏教は洛陽を中心とした黄河流域に浸透してゆくのだが、後漢の国力が衰えると日本でも評判になった映画「レッドクリフ（赤壁の戦い）」など群雄が割拠して争う「三国時代」から晋（しん）の国が起り、さらに騎馬民族が台頭する「五胡十六国」の時代を経て「南北朝時代」と目まぐるしく戦乱の時代が続くのである。この南北朝時代に少しの間だけ南朝に存在した「梁（りょう）」の国から日本に来ていた司馬達等（しばたつと）が日本仏教の元祖であることは「国分寺余話その一（仏教の伝来）」に述べたとおりである。

北朝のほうは晋の系統を継ぐ「北魏」が支配していたが、この王朝にはモンゴル系遊牧民族の血が入っていたと言われて、一時期であるが仏教を弾圧し僧侶を殺そうとした。そうした苦難の時代に中国の仏教はどうしていたかと言うと、先に紹介した「シルクロードと宗教の道」に依れば「仏教が呪術的機能として受容された」のだそうである。国家的古いやら民衆の災い除け祈願に存続の方法を見出した、とある。日本でも正月などに繁盛する寺院などは、それを利用して儲けているので変則的ながら中国文化の恩恵である。

広大な国土を持つ中国では、二世紀に起こった「黄巾の乱」やら十四世紀の「紅巾の乱」など、黄色と赤の違いはあるが新興宗教が国の歴史を変えたりしているの、日本のように仏教が朝廷の権威と結託して勢力を広げることが難しかったようである。そうした中で、西暦三百年代に占い師として活躍していた漢民族の一人が本来の仏教に目覚めて数百人ながら教団を組織し、戦乱を避けて各地を放浪していた。それを、司馬達等の先祖かどうかは知らないが司馬叡（しばえい）という

人物が建てた東晋の国の王様が援助をしていた。しかし東晋の国もあつてなく滅びてしまった。

中国大陸における仏教の危機であるが、意外にも当時は野蛮人と思われていた遊牧民族の王様で仏教に理解を示した人物が居て、三百年代後半に現在の西安を都としたためシルクロードを経由して仏教文化が中国に流入するようになった。その頃にシルクロードの小国に居た印度系の貴族で仏教徒の「鳩摩羅什（くまらじゅう）」が西安に迎えられ、ヒンドウ語で書かれた仏教経典を漢語に翻訳したのである。それが日本にも法華経や阿彌陀経などの重要な経典として伝えられている。

歴史は時に皮肉なもので、鳩摩羅什を庇護してくれたのは名前さえ後世に良く伝わっていない小さな国の王である。その後の中国大陸は不完全ながら南部を東晋が押さえ、北部を北魏が領有してから、日本でも知られた「隋（ずい）」「唐（とう）」に統一支配されてゆくのであるが、特に北部は猛獣の争いのように混沌としていた。そして不思議なことに、その時代は中国の仏教が奇妙な形で盛んになる。いわゆる「石窟寺院」＝崖を掘って洞窟を造り、そこに大きな仏像を刻んでおくものが各地に造られ出したのである。

石窟寺院は印度で雨期や酷暑を避ける瞑想の場所として造られたと言われ、それが仏教の普及に伴って敦煌（どんこう）に伝わり、中国では雲岡（うんこう）、炳靈寺（へいれいじ）、麦積山（ばくせきさん）など現存するものだけでも何百か所にも及んだ。このうち三天石窟とされるのが敦煌雲岡、そして龍門である。

龍門石窟は黄河上流の古都・洛陽から十数キロの支流川沿いにあり、北魏から唐まで七代に亘る

王朝時代に掘り続けられて洞窟の数は一三五〇、岩に刻まれた仏像十万余と言われる。その中で最大の第九十六窟は「奉先寺」と呼ばれる四十m四方の場所であり、其処に九体の巨大な像が彫られている。その中央に鎮座する「毘盧舎那仏（びるしゃなぶつ）」は西暦六五九年、日本では齋明天皇の時代に完成したとされているから比較的新しいが、完成までには長い年月を要している。

大仏の高さは十七・一四m、首の長さだけで四mもある。顔立ちは端正でモデルは「則天武后」とされ彼女が造らせたというが疑わしい。娘時代は美貌であつたらしいが「顎が張り額が角ばつていた」と記録されているから顔立ちの良い大仏像には似ていない筈のだが、正確に造ると殺されるから仏師が美人に加工したのであろう。

則天武后とは、「隋」から引き継いで大唐帝国を創始した高祖・李淵（こうそ・りえん）から三代目の皇帝・高宗の皇后になった「武照（ぶしょう）こと武則天」のことである。中国の歴史で唯一人の女性皇帝とされるが皇帝になったのは自分で決めたことで、生まれは材木問屋の娘であり、良く言えば「強烈な個性」、一般常識からすれば「悪女」に分類される。武照の父親は商売に成功して官僚の身分を買い、地方の長になったが根が商人なので公務員暮らしに馴染めず退職して悠々自適の暮らしをしていた。四十歳を過ぎても夫婦に子供が生まれなかつたので、妻が推薦した愛人が命と引き換えにやっとなんだのが武照であつた。

武照は早熟な子で学問の覚えも早く才色兼備に育つたが自由奔放・天衣無縫で行動が現代のギャルに似ていた。日本では「大化の改新」時代のことであるから評判になり、自治体の推薦で唐の皇

帝・太宗こと李世民の後宮に送られた。皇帝の後宮には大勢の美女が居たから、田舎の小娘など出る幕は無いのだが武照は恐れず庭を散歩していた皇帝を誘惑したのである。その時は十四歳だったとされる。創業者である高祖・李淵の跡を継ぎ唐王朝の基礎を固めたと言われる太宗も、型破りな小娘・武照の不思議な魅力に囚われてしまった。それが原因かどうか皇帝は病に臥した。

余り信用は出来ないが或る野史には「皇帝の見舞に行つた皇太子を、付添いの武照が誘惑した」と一部始終が描写されている。太宗は回復せず西暦六四九年に死亡した。慣例により後宮の女性は髪をおろして宮殿から出された。武照も尼さんの姿で実家へ戻つたが、程なく皇太子から呼び出しがあった。少し髪が伸びてから武照は宮殿に戻り、第三代皇帝になって高宗と称した皇太子の後宮で身分の高い側室に迎えられるのである。

高宗には皇后が居たが子供は生まれず、別の側室が生んだ男児が皇太子に立てられていた。武照は高宗との間に男児と女児を生んだ。皇后は武照が生んだ女児を可愛がっていた。或る日、その女児が皇后に遊んで貰つた後に急死した。武照が我が子を殺害したのである。疑いは皇后にかかり泣き叫ぶ武照の手前、高宗は無実の皇后を追い出してしまったから、その後釜に据えられた武照は則天武后と呼ばれるようになった。反対した重臣たちの命が無かつたことは言うまでもない。

これだけだと武照は悪女で終わるのだが、身体が弱かつた高宗は政務が重荷になり、代わつて則天武后が国政に関与する機会が増えた。その期間には二十八年に及び、高宗の死後は国名を「周」と改め自ら皇帝として政治を行った。人材の登用、

高齢者保護などの善政も布いたが、概して血腥い独裁政治であつたらしい。先に指名された皇太子は消され、則天武后が生んだ中宗が第四代の皇帝になる。武后が八十歳で病いの床に臥すと忽ち権力を奪われ国名は唐に戻されてしまった。

則天武后の数少ない業績の一つに「仏教の保護」がある。洞窟内の大仏建立もそうだが、中国領土内の各県と主要都市に官立の寺院を建立させたのである。ところが則天武后の失脚・死亡により一部の歴史が直されたり削られたりして話が少し込み入ってくる。大唐帝国の前の「隋」の時代と思われる頃に、中国大陸へはシルクロードを経由して「マニ教」が入ってきた。

この宗教は西暦二百年代にバビロニア生まれのイラン人であるマニーが創始したもので、サーサン王朝の皇帝に庇護されて一時はフランス、北アフリカ、中央アジア、印度などに広がつた。しかし政権交代で邪教とされマニーは処刑されてしまったのだが、中国へは漢字で「摩尼教」と書く宗教として入つていたのである。教義は単純で古代宗教のゾロアスター教を基にしてキリスト教、仏教、イスラム教などをミックスしたものであるから、パン、うどん、すいとん、饅頭などを固めて小麦粉の塊にしたと同じ原理である。ただ偉そうにしている諸宗教は、どれも教祖が教義を創つていないのだがマニーだけは自分で書いていたらしいから、これが本来の宗教と言える。

則天武后は摩尼教に帰依して仏像や寺院を建立させたのであり仏教だけを信じていたのでは無かつたと思われる。しかし細くても大きくてもうどんはうどんであるから既に在つた仏教の寺は其の俣で摩尼教の寺にされてしまった。因みに唐の第二

代皇帝・太宗は仏心厚く、現存する三蔵法師ゆかりの大雁塔を西安に建立しているから、唐王朝は早くから仏教に帰依していたので、則天武后は先帝・高宗が造りかけた大仏の顔を自分の顔に変えさせた疑いもある。幸いにして完成した仏像は美人であり悪女・則天武后には似なかつた。

この女帝が即位した頃に一卷の経文が宮廷へ届けられた。「大雲経」と書かれていたが、偽物であり中には「則天武后こそ弥勒菩薩の生まれ変わりであるから正に唐王朝に代わつて天下の主たるべし」と記されていた。本人が喜ばない筈はない。直ちに大雲経がコピーされて諸国に配られた。さらに国分寺として官立の寺を建て「大雲寺」と命名するように布告が出されたのである。

その頃、日本から遣唐使に従つて留学していたのが後に橘諸兄に見出されて聖武天皇の側近となる「玄昉(げんぼう)」と言う僧侶である。玄昉はコンビの吉備真備(きびのみび)と共に天平七年(七三五)に帰国するのだが養老二年にも第八次遣唐使と共に往復していて、その時に一緒だった僧の道慈(どうじ)が新しい「金光明最勝王経」を伝えていたから、これを置く場所としても諸国に官立寺院が必要であつた。玄昉は天皇の生母・藤原宮子の病気を怪しい療法で直し、聖武天皇に近づくことが出来たので、中国で見聞した大仏像と国分寺(大雲寺)のことを吹き込んだ。

「国分寺余話その三」でも触れたが、身近に面倒な出来事が起こつてノイローゼ気味であつた聖武天皇は玄昉たち「帰国子女」ならぬ「帰国爺」から聞いた大仏と諸国国分寺のことが気になつてならない。気晴らしのため、折角、遷つた奈良の都を抛り出して近畿地方の放浪を開始し河内国に

いた中国系帰化人たちが造った知識寺の大仏を見たから、どうしても大仏を建てたくなかった。しかし大仏建立となると資金面、技術面、立地条件などで慎重な準備が必要となる。光明皇后がなだめて、取り敢えず天皇の懐が痛まない諸国国分寺、つまり大唐帝国・則天武后が建造させた摩尼教の大雲光明寺を建てさせることにしたのである。

本場・中国の大雲光明寺は、則天武后の失脚で多くが破壊されたようである。日本でも律令制度の崩壊で諸国国分寺の権威が失われ、その遺構さえ分からなくなっている中で、常陸国分寺と国分尼寺の跡が明らかになっていることは歴史として貴重と思わなければならない。故意に破壊され弾圧された中国でも「摩尼教の国立寺院・大雲光明寺」の名前だけは伝わっているのである。

◎「中国大陸の国分寺」関連資料

一、伝説による中国古代の王（神）

①伏犧（ふくぎ）

人面蛇身で「八卦占い」「文字」「婚姻制度」「漁業」「牧畜」「楽器」などをつくった。

②嫫（じよか）

伏犧の妻とされ伏犧の制度を広めた。一説では、黃河流域の黄土から「人類を創造した神」とも言われる。

③神農（しんのう）

日本でも露天商や医薬の神として知られている「神農さん」であり、人身牛頭で農業、商業を興し、医薬を開発した。

：以上の三人？を「三皇」とする。これ以前に「燧人（すいじん）」が「火の使用を教え」、「有巢

（ゆうそう）」が「猛獣被害を避ける樹上生活」を教えた：とする説もある。なお、シルクロードの遺跡（墓絵から伝説どおりの「伏犧・女が出土していると言われる」。

①黄帝（こうてい）

「衣服」「住居」「文字」などを広めて人類の原始的な生活を改善した―部族の発生

②顓頊（せんぎよく）

王として「暦法」を定めた。

③嚳（ていこく）

次の皇帝である「堯」の父親とされる。

④帝堯（ていぎよう）

⑤帝舜（ていしゆん）

この二帝は、禅譲により即位し、理想の政治を行ったとされる。

：以上の五人？を「五帝」とし、合わせて「三皇五帝時代」という。黄河文明の部族国家？

なお、黄河文明より三百年ほど古い「揚子江上流域」の古代文明「三星堆遺跡」が成都市近郊で発見され、初期養蚕業と青銅器文化を主体とする王朝の存在（推定）が注目されている。

二、夏（か）

三皇五帝の後に黄河流域で繁栄した王朝として「夏」があり、紀元前一三〇〇年頃から、およそ四百数十年間に亘り、十七代の王が居たとされるが未だに存在が確認されていない。伝説では次の二人の王の事跡が伝えられる。

禹（う）王―帝舜から受け継ぎ黄河の治水に尽力し太陰暦を定めた。以後、王権は世襲となる。

桀（けつ）王―無道にして政務を怠り、殷の湯王（とうおう）に滅ぼされた。

三、殷（いん）、「商（しょう）」とも言う。紀元前千七百年頃に湯王が夏王の桀を滅ぼし河南省に都を置き善政を敷く。王・盤庚（ばんこウ）の時代に都を「天邑商（てんゆうしょう）」―安陽県に遷す。帝乙（ていいつ）紀元前一一五〇年頃 紂王（ちゆうおう）紀元前一二〇〇年頃、暴虐のため「周の武王」に滅ぼされる。

ことば座「風の塾」生徒募集！

ことば座では、暮らしの中で自分を発見し、表現するための後押しをする教室「風の塾」を開いています。

◎絵と一行文教室（講師：兼平ちえこ 白井啓治）

◎朗読教室（講師：白井啓治）

◎エッセイ教室（講師：白井啓治）

※（各教室は月二回の授業。受講費月額 3,000 円）

詳しくは「ことば座事務局」☎0299-24-2063(担当：白井) までお問い合わせください。

四、周（しゅう）

武王の後、成王、励王、宣王と続き、紀元前七七〇年頃に幽王が国を滅ぼす。（西周）

五、西周の幽王が溺愛して国を滅ぼした怪しい女性「褒似（ほうじ）」の出生に纏わる話：中国で実在が確認されていない「夏（か）王朝」の繁栄に陰りが出てきた頃、或る時に王宮の一面に突如として二匹の龍が現れ驚く人々に向かつて

「我らは神であり、龍の姿をしているが褒の国の二人の王である」と言った。

急に言われても信用が出来ないし、褒の国は周の属国であるが、国王が龍だという話は聞いたことが無い。人々がうろたえている間に二匹の龍は居なくなつた。しかし、その跡に泡が残っていた。誰かが「これは龍の吐く精気であるう」と言ったので、それを器（うつわ）にいれて王宮の蔵に納めておいた。

程なく夏の国は滅び、その怪しい器は殷に伝わり、殷の滅亡で周に伝えられた。その間に開けて見る者は居なかつた。周の三代目の王で暴虐な王と言われた励王が、その話を聞き、王の威光で開けさせることになつた。

命じられた家来が恐る恐る蓋を開けると不気味な泡が止めどなく流れ出して庭に広がった。どういふ感覚か知らないが、泡を止めるのに一人の女官を裸にして大声で叫ばせた。すると、泡は頓時に消え、悉こに一匹の蝶

現れて王の後宮に逃げ込んだ。その頃、後宮にいた一人の側室が女兒を生み、そ蝶子は未だ歯も揃わない幼児であつたが蝶

を見て急に成長し年頃の娘になつた。程なく、その娘は相手も居ないのに懐妊して女の子を生んだ。

母親は気味悪がつて無情にも女の子を捨てた。偶然に周の国から褒へ行こうとしていた夫婦がその子を拾い、褒の国で育てた。女の子は養父母のもとで美しく成人した。夫婦には主筋に当る人物がいて、その者が罪を犯した。その男は美人の娘を王の側室に差し出して自分の罪を逃れようと企み、夫婦を脅して承諾させた。

その頃、西周の王は龍の器を開けさせた励王の孫の幽王であつた。差し出された娘を見た幽王はその娘の妖しい美しさに魅せられ、褒の国から来たので「褒似（ほうじ）」と名付けて寵愛した。

（西周の滅亡―「中国大陸の国分寺」による）

六、西周滅亡後の王朝及び帝国

①東周―「周」は本来、遊牧民族だつたと言われる。黄河上流域に定着して農耕民族になり、殷に服属し殷の衰退に乗じてこれを滅ぼした。

幽王の事件以来、国力は衰えていたから「東周」は名ばかりの国であつたと思われ。（分裂諸侯割拠）

②春秋時代、戦国時代

「衛」「韓」「趙」「秦」「齊」「魏」「燕」「楚」などの国々が勢力を競いあつた。

③秦（しん）―弱小国「秦」を始皇帝が一代で大帝国にしたが、始皇帝死後は急速に滅亡した。

④漢（前漢・紀元前二〇二年〜西暦八年）

秦を滅ぼした両雄・楚（そ）の項羽と沛（はい）を本拠とした劉邦とが覇を競い、劉邦が勝つて

漢王・高祖となり長安（西安）に都を置いた。十数代、二百余年続いたが紀元前一四〇年頃の武帝時代が最盛期、外征と宮廷内部の腐敗により衰退して魏などの服属諸国に力をつけさせ、一族の離反を招いた。

⑤新（しん）

西暦八年から二三年までの短期間に、元帝皇后の一族である「王莽（おうもう）」が幼い皇帝を擁して建てた。幼い皇帝は毒殺されたが国も滅びた。

⑥漢（後漢・西暦二五年〜二二〇年）

光武帝（劉秀）が漢の王室を再興して洛陽に都を置く。この時代に日本の小国との交流があつた。後漢時代には**仏教が中国に伝わり**、明帝時代に**白馬寺を建立した**。同時にこの頃の中国では「**儒教**」が**国教とされた**。やがて豪族たちの勢力争いに依り国家が衰退する。（後漢帝国時代、紙の発明）

⑦三国時代（魏・蜀・呉）魏が大国となる。

「三国志」で知られた曹操の子が魏の文帝となり、衰退した後漢を滅ぼした。文帝は後漢の最後の王である献帝を廃して帝位に即き、洛陽を都とした。

⑧西晋（せいしん）（魏晋南北朝）

三国志で蜀の軍師・諸葛孔明と競つた魏の司馬仲達の子孫がクーデターで魏の実権を握り、次第に勢力を拡大して天下を統一した。（西暦八〇年頃〜三二六年）内乱により四代で滅亡

⑨東晋（三二七年〜四二〇年、江南地域）

⑩五胡（匈奴（ききょうど）、羯（けつ）、鮮卑（せんび）（てい）、羌（ききょう））

十六国（前趙、後趙、前秦、後秦、西秦、前燕、

ふる里の歴史・文化の物語を 朗読に聞く夕べ

(毎月第2土曜日 19時より)

いしおか補聴器では、らふるさと風の会、ことば座の協力で、ふるさとの歴史・文化の物語を、囲炉裏を囲むような形で、朗読に聞く「ふるさと知ろう会」を開催しております。

6月12日の第8回朗読会は、打田昇三作「興亡の連鎖（その四 反乱の結末）」です。

「現在の石岡市が元気が無いのは、古代の国府だったこの地に連綿と続いた豪族が六百年前の事件によって没落してしまったことに遠因があるように思えてならない。今回は、石岡の大掾一族が滅亡へひた走る戦乱の世の物語を、打田史学に考証して行きます。

定員は10名程度となりますので、ご予約の連絡を頂ければと思います。

朗読後、作者を囲んでのお話し会があります。

朗読会参加料金 1,000円 (コーヒーor お茶、お菓子付き)

いしおか補聴器 ☎0299-24-3881

後燕、南燕、北燕、前涼、後涼、南涼、北涼、西涼、夏、(成漢)

①五胡十六国の後は「北魏」から「西魏」「北周」「中魏」から「北齊」に移る。(北朝)

②東晋の後は「宋(そう)」—東晋の軍人が奪った王朝、約六〇年で滅亡↓「齊」↓「梁」↓「陳」

「後梁」へ(南朝)

③隋(ずい) 中国統一

北魏のあとに短期間存在した北周の臣・楊堅が隋国に封じられ、その子・楊堅が娘を皇后とした。

皇后の子が即位し、実権を握った楊堅が随王となった。(文帝)文帝の子・煬帝(ようだい)の時、日本から小野妹子が遣隋使として行く。朝鮮出兵に失敗して天下が混乱、西暦六一八年終末

④唐(大唐帝国) 九〇七年

隋の僻地防衛に当たっていた公李淵が挙兵、長安を占領して煬帝の孫を皇帝としたが禪譲により即位、唐の高祖となる。高祖—太宗(李世民) —高宗—則天武后(高宗の皇后) —中宗(武后の子)

【特別寄稿】

①「鷲の住む筑波の山」に

鈴木 健

「ウンぱっかりツクバサン」といわれるが、これは本当の話です。

「鷲の住む 筑波の山の・・・」(1759)、「筑波嶺に かか鳴く鷲の・・・」(3390)。万葉集には筑波の鷲が二か所で姿をみせる。それは歌のうえの話だ。あるいは、万葉のころはいたかもしれないが今はいるはずがない。だれもがそう考える。筑波の山は平地のなかの低山。高速道路が取り囲み、西は学園都市、東には百里基地・茨城空港。たしかに在るはずはない。ところがそれがない。

この四月十三日の十二時ごろのことだ。場所は筑波山の北面、ユースホステル跡地から車道を一キロほど降りると道が二またに分かれる。標識に酒寄駅何キロとある左の道に入る。そこから約一キロ下ったあたりで、左の路肩に、毛並みのぞろいの太った生き物らしい物体があった。同乗者一同「あれっ」と叫ぶまもなく、真ん中あたりが動き、鉤の手に曲がって先の尖った分厚いくちばしと鋭い目と獐猛な顔がヌツと現れ、間をおかずに飛び上がった。フロントガラスの目の前を「ワッシ ワッシ ワッシ」と大きな翼を動かして高度をあげ、風に乗るかのように体を翻して、悠然と谷間に姿を消した。

筑波にワシがいるはずはないということからすれば、トビかタカということになる。しかし、まづサイズが違う。翼長は畳一畳の約四分の三。「ワッシ ワッシ」は約五秒に三回。太く恐ろしく

ちばし。顔つきの獯猛さ。その悠揚迫らぬ挙措と容姿はワシ以外のなにもでもない。

では何ワシか。以前、内原の武器池に尾白鷺が飛来して話題になった。尾白は魚を狙うので、鯉の養殖をしていた武器池に現れたのだ。これまで茨城で知られていた鷺はこの尾白鷺だけだったので、尾の色に注目したが、白色は目に入らず、尾を含めて体全体が茶褐色であった。それに筑波では魚がとれない。ほかに本州に生息するのはイヌワシだ。凶鑑で調べてみても、体躯、容貌・習性等から彼はイヌワシに違いなかった。路肩にうずくまっていたのも、そこで、兎か狸の肉を切り裂いていたのである。ただし、凶鑑のそれは、頭・顔・体の毛がなでつけられているが、目の前に現れた彼は、全身の毛が立ち乱れていた。獲物に興奮したのか、突然目の前に現れたクルマという巨大物体に恐怖を感じて全身の毛を逆立てたのか。

イヌワシは貴重な絶滅危惧種だ。できれば筑波に定住してもらいたい。幸か不幸か筑波山は平野のなかの孤島なので、他への移動は制限される。住み着くにはそのような地理的条件ばかりではなく、食料の確保という安心と危険にさらされないという安全の保証が必要になる。安心はその獲物である兎や狸などへの人間による直接間接の加害によって損なわれ、安全は林道での二輪、四輪の騒音や暴走で脅かされる。彼の姿は下界の人間どもを尻目に悠々と気流に乗っているように見えるが、食べ物にはありついているのだろうか。

一三〇〇年前万葉人が詠った「鷺の住む筑波の山の・・・」が南麓の「ふれあいの里」に大きな筑波石に刻まれて訪れる人を迎える。筑波の山がいつも「鷺の住む」山、人とワシの「ふれあいの」

できる山であつたらすばらしい。

もし暇でしたらそつと彼の様子を見に訪れていただけませんか。

②私のスペイン旅行記(3)

ギター文化館代表

木下明男

マ スペイン食事事情

5月3日・4日・5日と続いた、《第五回ギター文化館シニアギターコンクール&ギターフェスティバル in やさと》がやっと終わった。このような取り組みの後は、終わった安堵感と疲れと脱力感でグタツとなつてしまう数日間だ。その後ジワジワと達成感、満足感そして、あーすればこーすればの後悔そして、もう二度とやるもんか…！もう来年の準備を始めている、こんな繰り返しで来年は6年目。今回白井さんに3日間も手伝って貰った、なのに原稿を限界を超えるまで待たせてしまった。

今回は食事について、思ったことを書いてみたい。まず到着するまでの飛行機の中の事だ、まるでプロイラー状態(肉用鶏)全く身動き取れない中で、14、15時間に5、6回も食事が出るのだ。時差の関係だろうと思うのだが…うつらうつらして起きると目の前に食事が…。またうつらうつらして気が付くと、おやつが…。と、こんな状態でマドリッドに付く。

基本的にスペインは、気候温暖で肥沃地があり、周りは海。豊富な海産物、肉も牛・豚・鶏なんでもある。また、果実、野菜も豊富、お米も、パンも、

何より世界一のオリーブ生産量だ。石と砂の荒地に一面にオリーブが植わっている。海岸に迫っている丘陵地は砂漠のようなガレ地、そこに人工的に並んだオリーブが植えつけられている。内陸は寒く、南の海岸は地中海性気候で暖かだ。

食事のときの飲み物は、圧倒的に赤ワイン(白ワインは少ない)。デカンタに果物がタップリ入って

いるサンテリアも、甘くてとても美味しく飲み過ぎしてしまいます。食卓にはオリーブの実が積まれています。特にお昼は、時間を掛けて食事をするので、大変楽しいです。肉は、何でもあるが…イベリコ豚が美味しかった。量が沢山ですね、肉やサラダ、諸料理、スープ最後に。パエリジャ、ついつい食べ過ぎてしまいます。飲んで、食って、また食って、2/3も切除した胃でも、10日間で5キロも太りました。

料理は、海鮮・肉・ハム(生ハムは美味しいですよ!)・チーズ(チーズも美味しいよ!)などのタンパク質が多く、それとオリーブに代表されるように油を使った料理が抜群に多いですね。其の所為か比較的太目の人が多いです。足(膝)の悪い人が多く、老若男女を問わず杖を付いている人が多かったような気がします。果物も沢山出ていたようです、マンゴーや釈迦頭(お釈迦様の頭のようにぶつぶつの皮を持った果物)などは安く数十円で買えます。

レストランでフルコース食べると4〜50ユーロ(五千円)位するので、中華を入れたりボール

で食事をするのが安く上がります。中華（中国？）の店は多いです。ホテルは安いですよ、殆どがバイキング方式で特徴がありませんので、つまらない。日本食レストランも、大都市にはありません。何でも揃っています、因みにマドリの「どんぞこ」と言う店に行き、お浸し、揚げだし豆腐、狸蕎麦を注文しました。美味しかったですよ！

水は、ミネラルウォーターが必需品です。街中何処でも売っていますし、安いですよ（1ユーロくらい）。観光地では自販機さえあります。（故障が多いけど？お金を入れても出てこない）スペイン料理は豊富な食材で、多数の種類があり、大変美味いけど、私は日本食がいいな！やはり、日本は最高でした！

コーヒーブレイク

くの二忍法

菅原茂美

昔読んだ時代小説に、忍者同士の決闘の場面があった。ある老練な忍者が敵の来襲を予知し、地面に耳を押し付け、迫り来る敵の人数、距離、方位などを確かめ、おもむろに呟いた。

『足音は4人だが、心の臓の音は5人分聞こえる』わけを聞かれ、『4人の中の一人は身重のくの一だ。やや子の心音がかすかに聞こえる』と答えた。

【風の談笑室】

今月号でこの会報「ふるさと風」もまる四年・四十八号となった。全く個人的なことになるが、風の会の前身であるふるさとルネサンス「民話塾」および劇団「しゅわーど」での講師を引き受ける誘因・動因となったのが、今回特別寄稿を頂いた鈴木健さんの「常陸国風土記と古代地名」であった。

本屋で何気なく買い求め、読んでいるうちに、我が家に迷い込んで住み着いてしまった白猫を主人公にした「新説柏原池物語」を書いてみる事になったのである。そして、この「新説柏原池物語」を書き下ろしたことで、町興しのための「民話塾」の講師を引き受ける気持ちになったのであった。

その後、審書房の太田さんから、石岡についての考察としてこんな文章がありますが…と送って頂いたり、浅からぬ因縁を持たせて頂いている。

その鈴木健さんから一節目の記念号となる本号に寄稿頂けてまたまた浅からぬ因縁を勝手に思っている。鈴木さんからは筑波山の鷺についての原稿を頂いたのであるが、文中にある万葉集は、小林さんの十八番の舞でもある。そこで、鈴木さんの文に紹介されている和歌の全文を紹介してみたいと思う。和歌と言うと5・7・5・7・7・7と思われがちであるが、これは短歌である。短歌がある以上、長歌がある。鈴木さん紹介の二首は、長歌と短歌である。

万葉集（1759）は耀歌会に参加した
ときのことを詠んだ歌である。

『鷺の住む 筑波の山の 裳葉服津の その津の

上に 率ひて 娘子壮士の 行き集ひ かがふ
耀歌に 人妻に 我も交はらむ 我が妻に 人
も言とへ この山を うしくは神の 昔より
禁めぬわざぞ 今日のみは めぐしもな見そ
事もとがなむ』

耀歌会の歌だから、鷺の住む…の詠み出しとは似つかわしくもない実におおらかなる性を詠っていていかにも万葉だと思わせる歌だと思う。

もう一首の（3390）は、巻第十四の東歌に収録されている短歌である。東歌には筑波山を詠んだ十一首の載っているが、その一つである。

『筑波嶺に かが鳴く鷺の 音のみをか 泣きわたりなむ 逢ふとはなしに』

連休の3日間、ギター文化館に応援ならぬ足手まといの手伝いに出かけてきたが、新緑の中、大勢のギター愛好家が集い、真剣・必死にギター演奏に取り組む姿は実に好ましいものであった。

しかし、私のような無愛想な男がCDの販売を手伝っても売り上げにあまり貢献できなかったらうなどと、木下代表には申し訳なく思う次第である。

今年の春は、実に落ち着かない陽気であったがゴールデンウィークは一気に夏がやって来た。このまま冷夏にならず走ってくれると嬉しいのだが。

編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

（白井啓治方）

<http://www.furusato-kaze.com>

朗読劇・朗読舞劇研究生募集!!

あなたの隠れた才能をことば座に発見してみませんか

ことば座では、朗読舞及び朗読舞劇に朗読する、朗読俳優および朗読舞俳優志望者を募集しております。

研修期間は12ヶ月。演劇としての朗読の基礎と演技手話を学んで頂き、研修後は、ことば座劇団員として活動して頂きます。

◎募集要項

募集：朗読劇&朗読舞劇俳優養成コース

募集人員：6名程度（最大10名まで）

※面接及び朗読と簡単な演技表現試験有り

養成期間：1年間（入塾は随時受付ています）

指導月4回

受講料：月額30,000円（全・半納割引有り）

※詳しくは、下記ことば座事務局までお問い合わせください。

舞台衣装等のデザイン・製作に興味があり、ことば座にボランティア参加して頂ける人、募集しております。

現在舞台背景画担当として風のことば絵作家の兼平ちえこさん、舞台装美として小林一男さんの参加を頂いております。

興味のある方、事務局の白井まで連絡下さい。

ことば座 〒315-0013 石岡市府中5-1-35 ☎0299-24-2063 Fax0299-23-0150

E-mail: shirais3@maple.ocn.ne.jp

詩を手話の舞に楽しむ「朗読舞教室」受講生募集中!!

ふる里に生まれた詩歌を朗読舞に楽しんでみませんか。

ことば座は、物語の朗読を手話を基軸とした舞(朗読舞)に表現する劇団で、朗読舞を演じる小林幸枝は、世界でただ一人の朗読舞俳優です。

教室は、第二、第四土曜日午後2時からを予定しております。

受講料は、月額3,000円です。(教室は、国府公民館そばの、ことば座稽古場)

(講師：小林幸枝 白井啓治)

詳しくは、下記ことば座事務局までお問い合わせください。

ことば座事務局(白井) ☎0299-24-2063

朗読舞劇団「ことば座」

「ことば(言葉)」とは、「心を口に繁らす」ことをいいますが、心とは真実、口は表現の手段、葉は紡ぐことをいいます。「ことば座」は、この言葉の原義に基づいて、物語に紡がれてある真実としての未来の夢を朗読と手話を基軸とした舞という二つの言語によって、自由で自在な舞台表現を創造しています。

ことば座が取組んでいる朗読舞及び朗読舞劇は、日本の古典芸能である能や人形浄瑠璃をヒントに、語り朗読を手話言語をベースにした舞技で演じるというもので、脚本：演出家の白井啓治が聾女優小林幸枝のために創案した石岡に生まれた新しい舞台表現です。

ことば座は、ギター文化館を発信拠点として朗読舞「常世の国の恋物語百」に挑戦しています。

ギター文化館発 ことば座第18回公演

6月18日～6月20日 (18、19日15:30開演、20日14:30開演)

「常世の国の恋物語第25話：**透明な青の色は龍の流した涙** (仮題)」

(入場料 3000円 ギター文化館・いしおか補聴器にて取り扱っております)

龍の棲むというこの山に登って来て、この国を見下ろしてみた。

誰にも一度の恋の思い出は持っているものである。

しかし、龍が棲むというこの村上の山の頂上からこの国を見下ろしたとき、何故か思ってしまった。

『この国に、かつて青春はあったのだろうか？ あったのだったらどんな青春だったのだろうか？ 本気に恋をした者たちが居たのだろうか？』と。

風子。 言葉は心の真実を語るものだけれど、
美しい分だけガラスのように非常に脆く
壊れやすいものだ。

だから風子。

言葉を常世の風にのせて舞っておくれ。

風子の舞の言葉の物語は、きっと明日の希望に生まれるのだから。

生涯学習として平家物語全段：百二十句の朗読に挑戦する兼平良雄。
第一回朗読会「第一句：殿上の闇討ち」同時公演。

脚本・演出 白井啓治
音楽 野口 喜広
(オカリナアート JOY)
舞台背景画 兼平ちえこ
舞台装美 小林 一男

朗読 しらみひろぢ
朗読舞 小林 幸枝

ことば座 〒315-0013 石岡市府中 5-1-35 ☎0299-24-2063 Fax0299-23-0150

ふるさと風の会展同時開催 6月18、19日(10時～15時) 20日(10時～14時)